

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	「文学国語」教科書の活用方法の研究：単元編成と収録教材の分析を通して
Author(s)	玉木, 雅己
Citation	論叢 国語教育学, 19 : 57 - 66
Issue Date	2023-07-31
DOI	
Self DOI	10.15027/54974
URL	https://doi.org/10.15027/54974
Right	
Relation	



「文学国語」教科書の活用方法の研究 ―単元編成と収録教材の分析を通して―

玉木 雅己

一 はじめに 研究の位置付け

本稿は、「文学国語」教科書について、単元編成と収録教材に着目して検討を行うものである。この両点は、今期（二〇二二年度使用開始）の教科書の特質と問題点を明らかにするだけでなく、活用方法を検討するための有効な観点にもなる。論者は、すでに、別稿・玉木（二〇二三）において、「論理国語」教科書の分析を行った。本稿での「論理国語」教科書への言及は、別稿の分析結果をふまえたものである。

二 研究資料

今次の学習指導要領の改訂によって、「現代文 A・B」の学習内容は、「文学国語」と「論理国語」に引き継がれた。

最終期（二〇一七年度検定）の「現代文 B」教科書は、9社21種だった。今期は、8社から「文

表 1

教科書会社	番号	教科書名
東 書	701	文学国語
三省堂	702	精選文学国語
三省堂	703	新文学国語
大修館	704	文学国語
大修館	705	新編文学国語
数 研	706	文学国語
明 治	707	精選文学国語
筑 摩	708	文学国語
第 一	709	高等学校文学国語
第 一	710	高等学校標準文学国語
桐 原	711	探求文学国語

学国語」11種、「論理国語」13種が発行されている。1社の減は、教育出版が、高等学校国語教科書から撤退したことによる（小中学校国語科は継続）。

表1は、「文学国語」教科書の一覧である。今回は、これらの教科書を研究資料とする。その分析作業は、二〇二二年度に勤務校に配付された見本本を用いて行った。

以下、本稿では、表1中の教科書会社名を、各教科書の略称として使用する。複数教科書を発行している3社に関しては、教科書番号703は三省新、705は大修新、710は第一標と表すこととする。

三 単元編成の分析

(一) 研究資料の単元編成の実態

「論理国語」教科書の単元編成は、主題単元を基本とする。全13種のうち、文種別単元は、第一「論理国語」「標準論理国語」、桐原「探求論理国語」に認められる。「論理国語」教科書では、一部の例外（桐原書店「探求論理国語」等）を除いて、文学教材は収録されていない。文種別単元の設定が避けられるのは当然のことだろう。

これに対して、「文学国語」教科書は、文種別単元が主流である。本章では、その実態についてみておきたい。

表2は、研究資料の単元編成状況を示したものである。今回は、〈文種別〉〈主題〉〈表現〉の3種類に分類した。〈 〉は、表2中の項目名を意味する。

先ず、〈文種別〉は、「小説」「評論」「戯曲」等の名称を持ち、同一文種の教材のみで編成された単元である。

その下位項目〈時代別〉は、「近代の小説」「現代の詩」等、作品の発表時期を、教材を単元に位置付ける根拠とするものである。

もう一つの下位項目〈主題名を付記〉は、「小説(五)虚構の可能性」等のような単元である。大修新「詩を味わう」「小説を楽しむ」等も便宜的にこの項目に含めた。

次に、〈主題〉は、単元で追究する主題を単元名とするものである。「文学の境界を広げる」「抒情の探究」「発想と感覚 文学の言葉を感じ取る」等が該当する。

なお、〈主題・同一文種で編成〉と〈文種別・主題名を付記〉には、実際の相違は認め難い。文種が明記されているか否かという程度の違いだけである。それゆえ、表2では両者の区切りは破線とした。

〈表現〉には、「創作をする」「文学の共同制作」等の表現単元と、

教科書名	文種別			主題		表現	計
	文種別	時代別	主題名を付記	同一文種で編成	複数文種で編成		
桐原	19				2		21
東書	16						16
三省堂	13			1	1	1	16
数研	6	8				1	15
第一		7	2	1	1	1	12
第一標		7	2	1	1	1	12
筑摩			18				18
大修館	1		17			1	19
大修新			14	6			20
明治					12		12
三省新					12		12

「近代の文章 文体の変遷」等の文体・文章に関する単元が含まれる。
(二) 各単元の実態の概観

ア 文種別単元

東書・桐原・三省堂は、文種別の単元編成を基本とする。東書は、全単元が文種別である。桐原と三省堂は、若干の主題単元を含む。

学習者にとっては、「小説(一)」「評論(二)」等の名称だけでは、「なぜこの単元が存在するのか」「何をこの単元で学習するのか」等を理解するのは難しい。そのため、東書・三省堂では、単元の扉頁に学習目標が示されている(桐原は、扉頁が設けられていない)。

文種別にも、魅力的な内容を持つ単元は存する。

たとえば、桐原・II部⑨小説IVは、「舞姫」と村上春樹「氷男」で構成される。後者の語り手の「私」は、周囲の反対を押し切り氷男と結婚する。気分転換に旅行した南極で、「私」は氷男の変容を感じる。しかし、妊娠に気付いた「私」は、孤独を噛みしめながら南極で生活することを選ぶ。そんな「私」とエリスを、男女の「分かりあえなさ」という観点から比較することは、読み深めのために有益だろう。

大修館・第I部④小説(四)想像を広げるでは、「山椒魚」と、川上弘美「離さない」が組み合わされている。「離さない」では、榎本さんと私は、浴室の中に住ませた人魚に執着心を募らせ、精神的に強く囚われた状態になる。しかし、何とか正気に戻り人魚を海に帰す。この二人と人魚、また、岩屋の中の山椒魚と蛙、それぞれの関係性の分析からは、興味深い比較結果が得られよう。

東書では、定番教材と現代作家の小説が組み合わせられる。「山月記」「いしいしんじ」「窓」「鞆」・角田光代「あの朝」、「檸檬」・森絵都「コンビニの母」が、それぞれ単元を構成する。いずれも意外な組み合わせではあるが、定番教材の読み方の再構築が期待できる。

桐原・II部「④詩」は、「詩人・草野心平からの贈り物」と題され、詩5編（春殖、冬眠、富士山（作品第拾巻）、アイスクリーム、猛烈な天）と、谷川俊太郎の草野への弔辞と、詩「●」（巨きなピリオド）から成る。名作選になりがちな詩単元としては斬新な単元である。

文種別単元では、学習者が、教材が組み合わせられた理由を考察することは、良質の学習活動となる可能性を秘めている。しかしながら、現状では、全ての文種別単元が、学習者の学びを豊かにするほどの創意に溢れているとは言い難い。深い意図はなく、便宜的に並べただけではないかと感じさせる単元も、残念ながら少数ではない。

イ 時代別単元

時代別単元は、学習者にとっては単元設定の必然性が乏しい。学習者よりも、教科書編集者の都合が優先されているように感じられる。

時代別単元が編成されているのは、第一・第一標と数研である。第一と第一標では、「近代の小説」3、「現代の小説」4、「近代の詩・現代の詩」各1が設定されている。また、数研は、小説単元だけが時代別である（他の文種は文種別）。小説単元は、「明治、大正2、昭和初・中・後期各1、平成2」と、元号別に細分化されている。

各単元の教材数は1〜2である。このような少数の教材で、それぞれの時代を代表させるといふのは無理がある。まして、元号別に分けることが、どのような文学的意味を持つのだろうか。また、各教材の時代性を検証するような「学習の手引き」等も設定されていない。

数研の内容解説資料には、「〈文学を流れの中で理解できる教科書〉をコンセプトとして定めた」（2頁）と記されている。では、例えば第一章の小説教材の配列「鍋セット・無用の人」「ナイン・三月の風」「山椒魚・水仙」「こころ」から、教科書編集者は、学習者にどのような「流れ」を読み取ることを求めているのだろうか。収録可能な短

編小説を、新↓旧の順に並べただけではないかという疑問が浮かぶ。

ウ 主題単元

表2から分かるように、文種とは無関係に、主題単元を編成する教科書は、明治と三省新だけである（これらは六章で検討する）。

大修館・大修新と筑摩は、〈文種別・主題名を付記〉が中心である。大修館には、「日常への視点」「発見と批評」「時代と表現」等、抽象的な主題名が並ぶ。大修新は、「小説を楽しむ」「文化を感じる」等、行動目標的な単元名になっている。両者とも主題名は短い。

筑摩は、「ことばから広がる世界」「背後にあるメッセージ」等、やや長めではある。しかし、この名称ならば、どんな教材でも適用できるのではないかと感じさせる点は、大修館・大修新と同様である。

ところで、「論理国語」の主題単元は、現代社会が直面する多様なテーマについて論じている。これに対して、「文学国語」の単元主題は、文学・文化・言語等が中心である。その他には、自己・歴史・哲学等がいくらか取り上げられる程度である。「文学」国語という科目の特性上、人文学的な話題が優先され、自然・科学・環境・情報・社会・経済等の主題が取り上げられないというのは納得できる。

そんな中で、桐原、第一・第一標、明治は、戦争を主題とした単元を設定する（第一・第一標は、同一内容の戦争単元を2つ設定）。いずれの単元も、教科書編集者の個性が強く感じられる。ただ、本来的には、教科書内の全ての単元について同様の創案が望まれる（なお、「論理国語」教科書には、戦争について論じた教材や、歴史的な主題を取り上げた単元はあるが、戦争を主題とする単元は認められない）。

桐原では、3教材の組み合わせの妙が感じられる。「靴の話」は、従軍時の経験を描いた定番戦争教材である。これに、日常を生きる人の生活や思いを、鉄道をうまく活かして描いた教材を併せている。

「米坂線109列車」は、

終戦前後の生活描写に加えて、8月15日も汽車が定時運行されていたことを伝える。また、

茨木のり子の詩は、第一・第一標のような定番教材ではなく、相模湾を望む根府川駅を舞台とする「根府川の子」を選ぶ。この詩からは戦争に対する批評精神が強く感じられる。

第一・第一標

は、第二次世界大戦、ベトナム戦争、イラク戦争を題材とする作品を集める。

どんな時代でも、どの国でも、戦争が、人々の日常生活を奪う無情さ・悲惨さが読み取れる。谷川と柴田の詩を選んだことに、本単元の独自性が鮮やかに感じられる。

明治は、ナガサキの被爆者の戦後と、レイテ島での兵隊としての経

験を描いた小説と、事実を認識することを、空間的・時間的な観点から論じた2編の評論で単元を編成する。学習者の当事者意識を強く刺激する内容になっている。

明治は、前編1「文学入門」でも、アゴタ・クリストフ「悪童日記」

桐原 Ⅰ部⑧「戦争と人間」

・靴の話 (小説) 大岡昇平

・米坂線109列車 (紀行・随想) 宮脇俊三

・根府川の子 (詩) 茨木のり子

第一・第一標 第Ⅰ部「戦争と文学(一)」

・バクダッドの靴磨き (小説) 米原万里

・わたしが一番きれいだったとき (詩) 茨木のり子

・死んだ男の残したものは (詩) 谷川俊太郎

・春—イラクの少女シャミラに (詩) 柴田三吉

明治 前編6「戦争と記憶」

・現場に来て初めてわかること (評論) 高野秀行

・空缶 (小説) 林京子

・野火 (小説) 大岡昇

・転移する記憶 (評論) 岡真理

を収録する。この小説は、主人公の兄弟の母親に砲弾が命中するという凄惨な場面で終わる。それを目撃した兄弟のシニカルな心理への理解をより深めるためにも、前編6と関連させて読むことが考えられる。

(三) 本章のまとめ

表2から、研究資料では、文種別に教材を分類して単元を構成し、そこにいくらかの主題性を加味することを、基本的な立場とするものが多いことが分かる。文種を問わないものは少数派である。

論者は、玉木(一九九一)で、当時の「現代文」教科書について、単元編成の実態を調査した。表2に示された状況は、約30年前の調査とほとんど変化が無いといって差し支えがない。

単元学習の根本に立ち返れば、教材の文種に縛られる必要性は無いはずである。主題を掲げながら、それを追究するために文種にこだわるといえるのは矛盾した態度といえよう。

逆に言えば、これまでの通例から外れたものには、新しい可能性を見いだすことができる。該当例については、第六章で検討する。

四 研究資料所収教材の数量的実態

本章では、研究資料の所収教材の文種に着目して検討を行う。

表3は、各研究資料について、①文種単元の数と比率、②小説・評論等教材の収録数と比率を、それぞれ調査したものである。

表3の〈評論等〉は、評論・論説・随想・随筆・解説等をまとめたものである。これらを細かく分類するのはそれほど容易ではない。以下、本文中でも、これらの総称として〈評論等〉を用いる。

教材の収録数に関しては、筆者名・出典名が明記されている場合には、断片的なものも含めて積極的にカウントした。そのため別の調査者が数えた場合は、数値が異なる場合があることをお断りしておく。

「文学国語」教科書は、小説・詩歌等の文学教材を中心に編集されているというのが、一般的なイメージであると考えられる。表3中の第一、第一標、数研等は、その典型例といえよう。

しかしながら、表3は、このような一般的なイメージとは異なる性格を持つ教科書が、けっして例外的な存在ではないことを示している。

表3は、〈評論等〉

単元の比率が高い順に配列した。最上位の筑摩は、小説よりも、〈評論等〉の方が多い。東書、大修館、桐原も、〈評論等〉が約三分の一を占める。

さらに、教材数では、筑摩・東書・三省・明治は、〈評論等〉が過半数を占める。三省新・桐原・大修館も、三分の一を超える。

このように、文種の数量面に着目すると、研究資料には、「現代文」教科書と近い実態を持つものが多く認められた。「論理国語」教科書が、〈評

教科書名	文種等による単元の分類							全単元中の比率		教材数		全散文教材中の比率		
	小説	評論等	詩歌	戯曲	翻訳 翻案	古典	文種 以外	計	小説	評論 等	小説	評論 等	小説	評論 等
筑摩	6	10	2					18	33%	56%	12	29	28%	67%
東書	7	6	2	1				16	44%	38%	12	14	44%	52%
大修館	10	6	1	1			1	19	53%	32%	18	15	42%	35%
桐原	9	6	4				2	21	43%	29%	17	11	61%	39%
第一	5	2	2				3	12	42%	17%	13	5	68%	26%
大修新	8	3	3			5	1	20	40%	15%	16	12	35%	26%
三省堂	6	2	2	1	2		3	16	38%	13%	14	17	14%	50%
第一標	6	1	2				3	12	50%	8%	15	3	79%	16%
数研	9	1	1	1		1	2	15	60%	7%	20	4	65%	13%
三省新							18	18	0%	0%	28	25	44%	40%
明治							12	12	0%	0%	16	25	37%	58%
平均								16	37%	19%	16	15	46%	40%

論等」と実用文の教材集になっているのとは対照的である。

五 収録教材の概観

本章では、研究資料の収録教材について概観する。

「論理国語」教科書では、定番教材を確実に収録する一方で、現代社会が直面する諸課題について論じた文章を積極的に教材化する。今日的な話題も、スピード感を持って取り上げている。桐原「精選論理国語」では、ポストコロナ後の社会のあり方を問う文章（隈研吾「変われ！東京」）すら収録されている。

「文学国語」教科書では、そのような情報の鮮度に重きを置くような傾向は強くない。むしろ、「論理国語」教科書以上に、「古典的」な定番教材を、教養主義的な立場から確実に収録しようとしている。

表4は、研究資料の延べ収録数の上位15位（3種類以上）の教材（俳句・短歌は除く）を示したものである。表4では、断片的な教材は除いて集計した。

表4の大半は定番教材である。ただ、その中で、松田青子「少年という名前のメカ」は、比較的新しい教材である（作品の初出は二〇一五年。最終期の「現代文」教科書から教材化）。平明な短編小説ながら、読み深めのための高い教材性を備えている。

収録数	収録数
11	山月記
11	こころ
10	永訣の朝
10	舞姫
7	檸檬
6	鞆
5	山椒魚
4	陰影礼讃
3	ナイン ひよこの眼 夏の花 藤野先生 少年という名前のメカ 小諾なる古城のほとり 小景異情

一方、新科目の教科書にふさわしい教材性の高い新しい文章を発掘しようという動きも当然認められる。

その代表例としては、角田光代が挙げられる。角田光代は、表5に示した通り、三省と明治を除く7社9種の研究資料に登場する。

数研と大修新は、異なる文種の教材が別の単元に収録されている。大修新「私たちの黄色」は、キャラメルのパッケージに広告的に掲載された、三〇〇字程度のショートショート3編である。創作の参考例として提示されている。

表6は、教材の延べ収録数が4以上の教材の作者(30名)について、何種類の文章が収録されているかを示したものである。今期の作者は、古典作品を除けば約260名である(これも集計の仕方で微妙に異なる)。

表6は、「文学国語」教科書に収録する教材としての適性を強く感じる者が、「文学国語」教科書に収録する教材としての適性を強く感じる

表6は、教科書編集

表6

種類	作者名 [〇は教材の収録数]
8	角田光代①
6	草野心平・村上春樹⑥
5	夏目漱石⑮ 川上弘美・太宰治⑦
4	多和田葉子・谷川俊太郎・萩原朔太郎⑤ 小川洋子・穂村弘⑥ 茨木のり子⑤ 川上未映子・小池昌代④
3	安部公房・梶井基次郎⑨ 谷崎潤一郎⑥ 井上ひさし⑤ 江國香織・原田マハ・坂口安吾・三島由紀夫④
2	島崎藤村・大岡昇平・中原中也・魯迅④
1	中島敦⑪ 森鴎外・宮沢賢治⑩ 井伏鱒二⑤

表5

語訳	現代	古文	評論等	小説			
				あの朝	旅する本	鍋セット	私たちの黄色
源氏物語	源氏物語	源氏物語(桐壺の一節)	「私は」書き出しの一行	ランドセル	私たちの黄色	鍋セット	旅する本
(訳者の言葉)	北山の垣間見		そとみとなかみ				
	三省新	数研	大修新	筑摩	桐原	大修新	第一 第一標
						大修館 数研	東書

人物のリストだと認定できよう。

表6では、定番教材の作者の大半は、種類の少なさから下位に回る。上位には、現代の高校生にも親しみやすい作品を発表している、現在活躍中の人物が多く認められる。小説家では、先の角田光代に加えて、村上春樹、川上弘美、多和田葉子、小川洋子、川上未映子、江國香織、原田マハが挙げられる。その他の分野では、穂村弘、小池昌代、さらに参考資料を含めれば、4種類となる蜂飼耳も加えて良いだろう。むろん、このような偏りが認められることには、危険性も感じられる。作者ありきで教材選択が行われることが危惧されるからである。個々の教材性そのものについて丁寧吟味する必要がある。

六 独自性を持つ教科書の単元編成の検討

本章では、筑摩、明治、大修新の単元編成について検討する。これら三者は、いずれも単元編成に関して強い独自性が認められる。

(一) 筑摩

筑摩は、すでに表3に示したように、単元数・教材数とも、文学教材より(評論等)教材の方が多い。これは「近年、人文科学の世界ではこうした反省からあらためてこれを広く文化全体の中で捉え直すという動きが一般化しており、こうした流れを踏まえた上で、本教科書もまた、旧来の狭い「文学」概念からの脱却を旨ざしている」という編集方針ゆえである(安藤宏「編集委員のことば」)。同社教科書の内容解説資料34頁)。

筑摩は、「随想・評論」10単元を設定する。これらには、次に示す第一部第4章のような革新的な単元が含まれている。この単元は、今期の「論理国語」各教科書に設置された、新機軸の単元を彷彿させる。

本単元は、現実に対する多面的な見方を獲得することを、学習目標とする。聴覚障害者が新しいコミュニケーション方法を獲得した経験を述べる第一教材。言葉という記号によって現実に秩序を与えていることを再認識する第二教材。金繕いによる欠損修理に着目すること、美や時間に関する新しい見方を提示する第三教材。これらを通して、自明だと考えていた日常に新しい視点を得ることが出来る。

筑摩 第一部 第4章	現実を揺さぶる想像力 随想・評論(三)	齋藤陽動
	異なり記念日	立川健二
	記号論と生のリアリティ	藤原辰史
	金繕いの景色	

筑摩の「随想・評論」単元には、定番教材も多く含まれている。そのような教材だけで編成された単元も存する。しかし、これまでに無かったような組み合わせによって、定番教材に、新たな教材性を発見しようという意図が認められる単元も認められる。

第二部 第3章	背後にあるメッセージ 随想・評論(二)	吉田文憲
	(うだでき) 場所の言葉	榎木野衣
	絵画は紙幣に懂れる	藤田省三
	隠れん坊の精神史	

第二部第3章は、その一例である。「隠れん坊の精神史」は、長年教科書に収録されてきた教材である(一九八一年初出)。本単元では、この定番教材と、近年発表された評論が組み合わせられている。3教材は、それぞれ、ふるさととはどんな場所か、価値はどのようなに創出されるのか、お伽話・遊戯の持つ意味とは何か、について論じる。本単元では、個別的な事象の中から、どのような本質的な意味を抽出・解明するのかという観点から読み比べることが出来る。なお、筑摩では、小説教材単元でも、次のように、定番教材との比

べ読みを企図したと考えられる単元が設定されている。第二部第7章は、主題面(他者への信頼/憎悪)で結び付けられる。第一部第2章は、登場人物の人間世界からの離脱という観点から読み比べることが出来る(この観点からの検討の詳細は、玉木(二〇二一)参照)。

筑摩は、「文学国語」教科書としての挑戦的な編集姿勢を備えていると評価できる。	筑摩は、
ただ、筑摩は、	ただ、筑摩は、
第二部 第7章 小説の可能性 小説(三)	藤野先生 魯迅
	沈黙 村上春樹
第一部 第2章 物語との出会い 小説(二)	山月記 中島敦
	神様 及び(参考) 神様2011 川上弘美

これまでの「現代文」教科書の姿をなぞっているように映るのも事実である。目次だけを示された場合、果たして見分けが付くだろうか。この点をどう評価するかについては意見が分かれよう。

(二) 明治
明治は、全ての単元が、主題単元である。各単元とも、複数文種(小説・韻文教材と、単元主題に関連する(評論等)教材)で編成されている。加えて、各単元とも4〜6種類の多目の教材を収録する。明治は、多彩な教材を組み合わせさせて読み応えのある主題単元を提示する。たとえば、後編4は、
アイデンティティとマイノリティという観点から、多様性を認め合うというテーマを追究する。小説は、来日した巨人の滞在記、人魚製造業と

明治 後編 4 自他への配慮	巨人の接待 (小説) 小川洋子
	はじめての沖繩 (評論) 岸政彦
	アイデンティティ (小説) 藤野可織
	愛について (評論) 竹村和子
	コラム マイノリティと文学

いう、ともに文学的な空想力を十分に發揮した作品である。逆に、「はじめの沖繩」は、岸政彦自身の沖繩での実体験を丁寧に掘り下げて、「ほんとうの沖繩」の有無について論じる。

この後編4の「単元の言語活動」では、先の3教材は、第四教材の「愛について」で取り上げられている、次の①・②のどれと関連があるのかという学習課題が設定されている。この分析的な課題によって、学習者は、単元全体の関連性を検証することができよう。

- ① 「名づけられること」
 - ② 「人と人との（あいだ）」
- 「名づけられないこと」 「自己の中の（あいだ）」
「自ら名づけること」

明治でも、定番教材と異質な教材を組み合わせる試みが認められる。

後編1は、都市に暮らす人々の生活を、「場所（と移動）」という視点から捉え直すことを狙って編成される。その中心になるのは、京都・浅草・台北を舞台にした小説3編と、バルトの論文を手がかりに、都市を

明治 後編1 都市と移動
・ 本を読む 〈評論〉 蜂飼耳
・ 檸檬 〈小説〉 梶井基次
・ 陰影礼讃 〈評論〉 谷崎潤一
・ 下町 <small>(メロウ)</small> 〈小説〉 林芙美
・ 歩道橋の魔術師 〈翻訳小説〉 呉明益
・ 都市は／を語る 〈評論〉 石田英敬

記号論・意味論的に分析することについて論じた評論である。

本単元では、「檸檬」も、都市生活者という観点から読み直すことができる。ほぼ同時代に発表された「陰影礼讃」は、京都の街の文化的な背景を描くための資料としての役割を担う（「本を読む」は、後編の序論的な内容を持つ。単元主題との関係性はやや希薄である）。

前編4は、「こころ」を中心とした単元である。「こころ」は、全研究資料に収録されている（1教材単元4、「現代日本の開化」や「私

の個人主義」を参考資料とする単元2、他の教材との組み合わせ4）。

この単元は、「言葉」の持つ不思議な力に着目して、次に示すように、他に類のないような連想的な単元を編成している。「こころ」から、漱石と芥川の往復書簡に繋がり、さらには夢の世界を想像で構築する短編小説、明治期の標準語政策を論じた評論へと続き、ロックバンド GRAPEVINE のソングライターの文章で締めくくられる。この文章は、音楽で勇氣・元気を与えたいという「おこがましく傲慢な動機でものを作る」ことを、自分に禁じていると述べている。その誠実な態度は、「こころ」のKを想起させる。

明治・前編4 言葉の力
・ こころ 〈小説〉 夏目漱石
・ 夏目漱石・芥川龍之介往復書簡
・ 山東京伝 〈小説〉 内田百閒
・ 「東京語」の表象の成立 〈評論〉 イ・ヨンスク
文学の窓 群れず集まる 〈評論〉 田中和将

(三) 三省新

三省新は、明治と同様に、複数種の文種による単元編成を原則としている。次のII部8のように、一単元の中で、現代文と古典教材を並列的に位置付けることも、全体の三分の一の単元で行われている。

後掲の両例のように、三省新は、一つの単元の中に非常に多くの教材を取り上げている。三省新の収録教材数は、断片的なものを全て含めると186にも上る。他の研究資料の教材数の平均は48（最小30〜最大62）である。三省新の教材は、短い文章が多いとはいえ、その収録数は他を圧倒している。

三省新は、比喩的な言い方をすれば、雑誌の特集頁のような印象を受ける。体系的ではないが、濃淡様々な関連性を持つ教材群が形成されている。多様性に富んだ切り口が準備されている。

三省新 II部 8 想像と創造 文学の想像力を捉える

・月火水木金土日

〈小説〉川上弘美

・川上作品をめぐって探

「大きな鳥にさらわれないように」

〈書評〉岸本佐和子

牛として

〈随想〉川上弘美

・源氏物語―北山の垣間見 紫式部原作

角田光代訳

・「寂聴源氏塾」探

〈随想〉瀬戸内寂聴

・想像への畏敬―大和路をゆく発展探

〈評論〉リービ英雄

コラム おもろさうしとユーカーラ

三省新 I部 4 作品の挑戦 自作のストラテジーを読み解く

・少年という名前のメカ

〈小説〉松田青子

・皮膚と心探

〈随想〉藤崎彩織

・バースデイ・ガール

〈小説〉村上春樹

・村上春樹の比喩表現例

〈短文集〉村上春樹

・バースデイ・ガールについて探

〈自評〉村上春樹

・コラム 表現者の言葉、享受者の感性 (教科書編集委員)

・高校生のための読書案内 好きなように読んだ 松田青子

さらに、三省新は、先に挙げた単元例でも明らかなように、教材に近付くための手がかりとなる文章を随所に設けている。「探究・発展探究」は、比較読み・重ね読みのために準備された教材である。

その他の単元でも、過剰さを感じさせるほどに、教材の読み方の提案が行われる。たとえば、「5 意味と解釈 表現の意味を捉え直す」では、「ここ」と富川健郎「物語もつと深読み教室」が主教材になっている。後者は、様々な文学作品を取り上げて、語りの構造に着目

しながら具体的な分析を行う。同単元には、「先生の死の謎」について論じる奥泉光「夏目漱石、読んじゃえば？」も収録されている。

その他にも、「山月記」には、三浦しをん「石ならぬ中島敦」を、「たけくらべ」には、小川洋子・俵万智の書評が用意されている。古典教材でも、花山院の退位には、永井路子と秋山虔の解説が、「虫めぐる姫君」には、中村桂子の解説が用意されている。

単元主題の追究のために、単元内に用意された教材を、どのように活用していくのか。そのための学習計画を、学習者自身が立案することも、三省新に関しては、極めて有効な学習課題となる。

七 おわりに

(一) 単元学習への明確な志向

今回の学習指導要領の改訂に際しては、「文学教育の危機」が盛んに喧伝された。本稿は、そのような理念的な議論ではなく、研究資料の数量的な実態と、具体的な単元例の紹介を行った。「危機」と言われる状況に対して、教科書編集者はどのように対応したのか、また、授業者は何をすべきなのかを検討する糸口を見いだすためである。

教材選択に関しては、これまで登場したことのないような新奇な教材は、それほど登場してはいない。むしろ、どちらかといえばオーソドックスな教材選択が行われていた。

その一方で、単元編成に関しては、従来の高等学校国語科教科書と比べて、教科書編集者の創意工夫を明確に認めることができた。本稿でも、主題追究のために構築された新発想の単元や、定番教材の読み方に新しい文脈を与えることを企図した単元を、多く紹介することができた。これらについては、なぜこのような単元が編まれたのかを分析

することも、質の高い探究的な学習活動となる可能性が感じられる。

高校現場では、年間の授業計画を立案する際には、どの教材を学習するかという点が重視されてきた。どの単元を学習するかという意識は、残念ながら非常に乏しかった。自らを反省すべき点でもある。

単元学習として、複数の教材を多角的に読み比べて認識力を高めていく。そのことを明確に意識した学習計画を考案する。研究資料の実態分析からは、このことが、授業者にとって強く要求されていることが明らかになった。

ただ、単元全体をまとめるような「学習の手引き」を設定するのは、先に紹介した明治だけである。多くの研究資料は、個々の教材だけを対象とした「学習の手引き」になっている。単元全体を視野に入れた学習内容の構築は、授業者に委ねられているわけである。

そのあり方を考えていくために、今後は、各研究資料の「学習の手引き」の実態や、「書く」ことに関する学習内容（特に創作的な活動）について、丁寧な検討を行っていく必要がある。

(二) 教育課程への位置付け

二〇二二年度入学生は、新しい学習指導要領に基づいた教育課程で学ぶ初めての高校生である。その教育課程は、二〇二一年度中に決定する必要がある。しかし、その時点では、「文学国語」「論理国語」「古典探究」「国語表現」の教科書は未発行だった。しかも、これらの教科書内容に関する情報公開は、見本の配付までは厳禁とされていた。「現代の国語」「言語文化」教科書から推測するしかなかった。大学入学共通テスト等への対応を考慮して、2・3年次の国語は、「論理国語」と「古典探究」という組み合わせが一般的なものとなった。1年次の「言語文化」では、従来よりも古典の学習量は減少した。それを補うために、「古典探究」を標準単位数（4単位）よりも増単

する学校が多かった。その一方で、限られた単位数の中で、現代文分野の2科目を併置することは困難との判断から、「文学国語」は退けられた。

中国新聞（二〇二二）によれば、二〇二三年度の教科書の需要数は、「古典探究」約104万、「論理国語」約85万、「文学国語」約48万であるという。このような数値になることは必定だったと考えられる。

次年度に向けては、定番の文学教材を集めた副読本が多数出版されている。その内容は、各社教科書をそのまま流用したようなものが多し。教育課程をめぐる議論の際に、六章で検討対象とした各教科書の具体的な内容が公開されていれば、もう少し多くの高等学校で、「文学国語」が教育課程に位置付けられたのではないかと思われる。

参考引用文献

- 玉木雅己（一九九一）「現代文」教科書の研究（1）―単元編成の観点から― 広島県高等学校教育研究会国語部会年報32号 57～88頁
- 玉木雅己（二〇二二）「小説単元の編成に関する実践的研究―川上弘美「草上の昼食」の教材化のために―」 広島大学国語教育学会「国語教育研究」第六十二号 56～67頁の64頁
- 玉木雅己（二〇二三）「論理国語」教科書の活用方法の研究―「単元編成」と「学習の手引き」に着目した教科書分析を通して― 広島大学国語教育学会「国語教育研究」第六十四号 53～65頁
- 中国新聞（二〇二二）「オピニオン 交論「国語教育の改革」の紅野謙介に対するインタビューの言葉 二〇二二年12月25日・日曜 6面2段

（広島県立広島高等学校）